

【九州国立博物館】（計14件）

<絵画>（2件）

1 名称	紫陽花文鳥図（あじさいぶんちょうず）	品 質	絹本着色
作 者 等	司馬江漢筆	員 数	1幅
時 代	江戸時代 文化5年(1808)	寸 法 等	本紙：縦100.0cm 横29.7cm、総寸：縦192.2cm 横42.7cm、軸長47.7cm
作品概要	紫陽花と二羽の文鳥を描く。花鳥は彩色、岩は水墨で表わし、異なる絵画技法の両立が試みられる。とりわけ紫陽花や虻には明暗をつけて立体感を表現する点が注目される。「七十一翁」の落款から司馬江漢（1747～1818）が9年の年齢加算を始めた文化5年（1808）（実年齢は62歳）の制作とわかる。 筆者の司馬江漢は、西洋絵画の技術を取り入れた作例を多く残しているが、本図は花鳥に油彩を用いるのみで、構図はむしろ江漢が宋紫石などから学習した沈南蘋風の花鳥画に近く、洋風画スタイルの作例としてはやや珍しい特徴を示す。江漢は晩年油彩を行わなくなり、西洋主題であっても墨画、淡彩が中心になっていくため、本図は希少な晩年期の油彩画として注目に値する。		
購入金額	16,000,000 円		



2 名称	水辺村童図（すいへんそんどうず）	品 質	絹本着色
作 者 等	安田雷洲筆	員 数	1幅
時 代	江戸時代 天保11年(1840)	寸 法 等	本紙：縦95.4cm 横34.8cm、表装：縦162.5cm 横39.9cm、軸長44.9cm
作品概要	前景に竹籠を背負う男性、赤児を負った子どもと犬、川を挟んだ遠景には透視図法（線遠近法）を取り入れた村落と山並みを表わす。雲のかかった空を画面上半分に広々と表わし、画面右の高く枝を張った樹木に一羽の鳥が留まる。その表現には刻線（ハッチング、クロスハッチング）を模した平行線や交差する線が見られるなど、西洋銅版画学習の痕跡が顕著である。落款「天保十一年庚子九月 雷洲安田尚義製」「Willem Van Leiden」により、安田雷洲（?-1859）の円熟期の作例、かつ細緻な描き込みから画家の代表作と位置付けられるものである。		
購入金額	13,200,000 円		

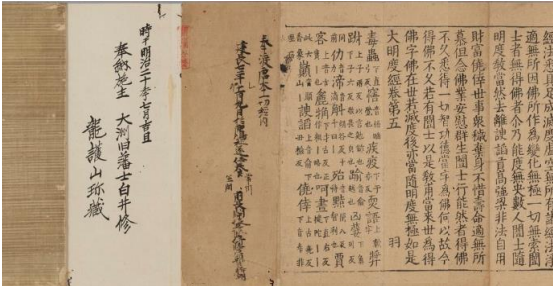


<書跡>（2件）

3 名称	装飾法華経薬王品断簡（そうしょくほけきょうやくおうほんだんかん）	品 質	彩箋墨書
作 者 等		員 数	1幅
時 代	平安時代 12世紀	寸 法 等	本紙：縦24.7cm 横49.0cm、表具：縦114.0cm 横63.0cm、軸長67.8cm
作品概要	『法華経』薬王菩薩本事品第二十三を書写した装飾経の断簡。料紙には金銀の砂子、野毛、切箔、特大の裂箔を蒔き、界線に金の截金を置く。天地には遠山と蓮池が彩色され、多彩な装飾技法に平安時代12世紀の特徴が見られる。本品は紙継を跨がない25行分の断簡であり、諸家に分蔵される断簡の書写形態から、もとは『法華経』全二十八品を1巻ずつ書写した一品経形式の経巻であったことが判明する。一品経は貴族社会における法華講会の大規模化に伴って盛行し、わが国における法華経信仰の展開を知る上で重要な書写形態である。さらに絵画的・工芸的な観賞性に富む料紙を用いた装飾一品経は極めて貴重であり、「善美」と言い表わされる平安時代の信仰と美意識が凝縮された作例といえる。		
購入金額	57,750,000 円		



4 名称	思溪版大百度經 卷第五（しけいばんだいみようどきょう まきだいご）	品 質	紙本墨刷
作 者 等		員 数	1帖
時 代	中国・南宋時代 12-13世紀刊	寸 法 等	縦29.1cm 横11.5cm 全長921.5cm
作品概要	日宋貿易の代表的な輸入品である宋版大蔵經（木版印刷）で、渡来後、鎌倉幕府御家人によって鹿島神宮（茨城県）に施入された大蔵經のうちの一帖。 奥書から、笠間郷（茨城県笠間市）を本拠とした鎌倉幕府御家人の笠間時朝が、建長7年（1255）に常陸国一之宮の鹿島神宮に納めた大蔵經、いわゆる「笠間經」の零巻であることが知られる。同經典群は江戸末期には散逸しており、寺院や故実家、収集家等の手を経た数帖が伝世する。宋版大蔵經の中では、比較的多く日本へ船載され、現存する思溪版大蔵經（北宋末）の一部だが、中世前期に渡来し、奉納者や施入先が明らかな渡来經典として希少である。		
購入金額	6,500,000 円		



<金工>（2件）

5 名称	三鈷鈴（さんこれい）	品 質	銅鑄造
作 者 等		員 数	1口
時 代	平安時代 12世紀	寸 法 等	高22.4cm
作品概要	銅鑄造、鍍金。鈷・把部と鈴身部を一鑄とする三鈷鈴。中鈷は、わずかに匙面をとりつつ下方に挟りを入れた四面錐形をなす。脇鈷は中央には鋭く鑄をたて、稜角に添って樋を刻む。把の鬼目は出の大きな二重瞭で4ヶ所に鑄出し、鬼目の上下に配した連弁帯は、蕊（しべ）と連珠を伴い、把上部は二条の紐帯で約す。一方、把下部の連弁帯は途中で紐帯に約され、下半は鈴身上に間弁付重圈八葉蓮華となってひろがる。弁先には葉をやや粗く刻み、魚々子鑿で葉頭をあらわす。また、肩下と裾元にそれぞれ三条の隆帯をめぐらせた鈴身は撫で肩で、下端に向かい穏やかに外反する。張りのある脇鈷、出の大きな鬼目、薄造りで穏やかな裾広がりの鈴身、青味を帯びた鍍金など、古様をよくあらわした平安時代を代表する三鈷鈴である。安田毅彦旧蔵。		
購入金額	66,000,000 円		



6 名称	重要美術品 六器（ろっき）	品 質	銅鑄造
作 者 等		員 数	1口
時 代	平安時代 12世紀	寸 法 等	高4.0cm 径8.1cm
作品概要	銅鑄造、鍍金。高台のついた小碗に台皿を備えた六器。碗は口造りが薄く丈が低くゆったりとした形姿をとり、高台から上方に向かい間弁付の素弁八葉蓮華を鑄出す。連弁には中央に鑄を立てつつ三条の弁脈を刻む。蓮華の花先には刻んだ蕊（しべ）が胴を巡り、更にその上に隆帯を二条めぐらす。高台裏には轆轤（ろくろ）の挽き目が明瞭に残る。碗を載せる台皿は素文で、碗と同様に轆轤で薄く挽き上げ、極めて薄い高台を取り付ける。薄造りで碗の口が外反し、丈低く安定感のあるところに特徴があり、平安時代にまで遡る連弁飾六器の代表的作例であるばかりでなく、伝世の六器のなかでも最古級の作のひとつとみられる。高野山安養院伝来。		
購入金額	22,000,000 円		



<染織>（2件）

7 名称	橙縮緬地櫨垣に桜文様小袖（だいだいちりめんじひがきにさくらもんようこそで）	品 質	絹
作 者 等		員 数	1領
時 代	江戸時代 17世紀末-18世紀初	寸 法 等	文：149.0cm 衿：61.0cm 袖文：42.0cm 袖幅：30.0cm 前幅（上前）：23.0cm 衽幅：15.5cm 衽下がり：31.5cm 衿肩あき：9.0cm 衿幅：6.5cm 衿下：70.5cm 後幅：30.0cm 身幅：60.0cm
作品概要	農民歌舞伎の衣裳という伝承のもと山形の鶴岡に伝わった小袖。縮緬地に櫨垣と桜の立木文様を型染めで表現している。このような立木文様の小袖は江戸期を通して製作されたが、器物文様と組み合わせられること、腰の上下で文様が連続しないこと、摺匹田（型鹿子）を用いていること、地組織が縮緬であること、左脇にわずかな空間を残した文様配置であること、以上の5点から、元禄期（1688-1704）から正徳期（1711-1716）にかけて製作された小袖（もとは振袖）であると考えられる。当初の地色は淡い黄と思われるが、現在は顔料（鉛丹）にて橙に塗られる。また中綿は除去され、背部分に木綿の裏地が当てられている。舞台衣装への転用を目的として改変されたと思われる。		
購入金額	3,500,000 円		



8 名称	紫紋縮緬地松籐簾に流水文様繡小袖（むらさきもんちりめんじまつぶじさにりゅうすいもんようぬいこそで）	品 質	絹
作 者 等		員 数	1領
時 代	江戸時代 19世紀	寸 法 等	文：161.0cm 衿：61.5cm 袖文：44.5cm 袖幅：33.0cm 前幅（上前）：24.0cm 衽幅：18.0cm 衽下がり：22.5cm 衿肩あき：9.2cm 衿幅：11.0cm 衿下：87.0cm 後幅：57.0cm 身幅：28.5cm 肩から内揚げまでの距離：51.5cm（前身頃）/47.0cm（後身頃）
作品概要	江戸後期の武家女性の小袖。紫の紋縮緬地に王朝文様や文芸意匠などのいわゆる御所解文様を素繡で表現している。刺繡で王朝文様や文芸意匠を表す小袖は江戸後期に盛んに製作されたが、縹子地や紗綾地が多く、本品のように紋縮緬を用いる例は珍しい。また袖が丸く、身八つ口がない形状は古様を示す。類例の中でも古い例であると考えられる。5つ紋には桂繡いによる抱き杏葉紋が入る。杏葉には縦筋が表現されており、鍋島本家の家紋と共通する。汀に立つ松に蔓を絡ませ咲き乱れる藤花の図様からは、能「藤」が想起される。		
購入金額	2,800,000 円		



<考古>（5件）

9 名称	土偶（どぐう）	品 質	土製
作 者 等	伝青森県平川市石郷出土	員 数	1軀
時 代	縄文時代 3,000年前-2,300年前	寸 法 等	長11.0cm 幅11.5cm 厚5.5cm
作品概要	縄文時代晩期の東北から北海道南西部にかけて分布する亀ヶ岡文化の土偶である。亀ヶ岡文化の土偶は肥大化した眼部表現を持つ遮光器土偶がよく知られているが、小さな目や人間らしい顔つきを持つ本品は遮光器土偶が型式変化により眼部が縮小化した時期のものである。仮面を身に着けたような扁平な顔面、髪結いと髪飾り風の表現を持つ頭部、首飾りのような刺突文のある隆帯を廻らせた頸部、動物の毛皮風の衣装を想像させる刺突文を有する体部など、縄文時代の装いの様子を具体的に知ることができる資料である。		
購入金額	4,950,000 円		



10 名称	注口土器（ちゅうこうどき）	品 質	土製
作 者 等	岩手県岩手郡葛巻町江刈五日市出土	員 数	1口
時 代	縄文時代 3,000年前-2,300年前	寸 法 等	最大径25.8cm 高13.8cm
作品概要	縄文時代晩期の東北から北海道南西部にかけて出土する亀ヶ岡文化の土器である。口縁部と底部を若干欠失するものの、大型の注口土器で、底部全面に施された雲形文が特徴的である。亀ヶ岡文化では、工芸技術や祭祀が発達し、精巧な造りの土器、土製や石製の祭祀具が多数生産されたが、本品はその特質をよく示す作例である。		
購入金額	4,950,000 円		



11 名称	壺形土器（つぼがたどき）	品 質	土製
作 者 等	岩手県岩手郡葛巻町江刈五日市出土	員 数	1口
時 代	縄文時代 3,000年前-2,300年前	寸 法 等	最大径14.2cm 高12.5cm
作品概要	縄文時代晩期の東北から北海道南西部にかけて出土する亀ヶ岡文化の土器である。口縁部を欠失するものの、精緻な表面研磨、胴部の雲形文、全面の赤彩が特徴的である。亀ヶ岡文化では、工芸技術や祭祀が発達し、精巧な造りの土器、土製や石製の祭祀具が多数生産されたが、本品はその特質をよく示す作例である。		
購入金額	3,850,000 円		



12 名称	台付鉢形土器（だいつきはちがたどき）	品 質	土製
作 者 等	岩手県岩手郡葛巻町江刈五日市出土	員 数	1口
時 代	縄文時代 3,000年前-2,300年前	寸 法 等	最大径13.6cm 高10.4cm
作品概要	縄文時代晩期の東北から北海道南西部にかけて出土する亀ヶ岡文化の土器である。胴部を一部欠失するものの、均整のとれた器形、薄作り器壁、台部の透し、精緻な入組文と羊歯状文が特徴的である。亀ヶ岡文化では、工芸技術や祭祀が発達し、精巧な造りの土器、土製や石製の祭祀具が多数生産されたが、本品はその特質をよく示す作例である。		
購入金額	3,850,000 円		



13 名称	獅噬環頭柄頭・柄頭筒金具（しがみかんとうつかがしら・つかがしらつつかなぐ）	品 質	青銅鑄造（茎のみ鉄鍛造）、鍍金
作 者 等	伝奈良県奈良市（旧大和国添上郡佐保村）出土	員 数	1組
時 代	古墳時代後期 6世紀	寸 法 等	柄頭：縦4.2cm 横5.4cm 最大厚1.5cm 柄頭筒金具：長5.6cm径3.2×1.6cm
作品概要	もとはは装飾大刀の柄の先端部分に装着した環頭柄頭と、環頭柄頭に接して柄を取り囲んだ柄頭筒金具であり、現状では遊離している。柄頭の外環は横長の楕円形を呈し、そのなかに獸面（鬼面）形の中心飾を配する。柄頭の下縁に大刀の茎の破断面が見える。 柄頭筒金具は厚さ1ミリ未満の薄板を楕円形に巻いて鍛接した造りをもつ。文様はない。柄頭筒金具のなかには基部で折れた鉄製の茎が残存する。茎は長方形板状を呈する。下縁は弓なりに弧を描く。末端附近の中央を目釘孔が貫通している。		
購入金額	4,950,000 円		



＜歴史資料＞（1件）

14 名称	豊臣秀吉定書 対馬国宛及び禁制 南海嶋宛（とよとみひでよしさだめがき つしまのくにあておよびきんぜい なんかいとうあて）	品 質	紙本墨書
作 者 等		員 数	1巻
時 代	(1)安土桃山時代 文禄2年(1593) (2)安土桃山時代 慶長3年(1598)	寸 法 等	表紙：縦45.3cm 横28.9cm 軸長：49.5cm 本紙：（第1紙）縦45.3cm 横60.2cm （第2紙）縦45.3cm 横59.0cm
作品概要	(1)文禄2 年(1593)正月付、対馬国宛の「定」、(2)慶長3 年(1598)3 月17 日付、南海嶋宛の「禁制」、計2通の豊臣秀吉朱印状が継がれて1巻に成巻されたもの。いずれも「文禄・慶長の役」に関連するものである。 (1)は5箇条からなる「定」で、軍規を遵守することを求めるものである。秀吉は天正20年6月に朝鮮半島への渡海を延期し、7月に大政所死去のため名護屋から大坂に戻った。再び名護屋に戻ったのが11月で、翌文禄2年3月の渡海に向けて兵糧と船舶の確保を奉行衆に命じている。(1)は秀吉が渡海の準備を進めるなかで、改めて朝鮮での軍勢の規律を求めたもので、朝鮮への兵站線上にある対馬に発給されたものと位置付けられる。 (2)は3箇条からなる「禁制」で、(1)と同じく軍規を守ることを命じたものである。宛所の南海島は、朝鮮半島の南岸の島で、倭城（日本型城塞）があった。南海島の倭城は、越冬の駐留拠点とするために、慶長2年10月中旬頃から半島南岸の各地に築かれた城塞の一つであり、宗義智が守っていた。城塞普請は突貫工事で進められ、用材と労働力の確保が急がれた。(2)は、城塞普請のための用材を確保できるよう、また労働力となる人々が逃散しないよう、軍規を守らせるために発給されたものと考えられる。 本品は、海軍軍人、貴族院議員、日本画家であった下條正雄（号：桂谷、1842-1920）の旧蔵品である。桂谷が入手する以前の経緯は不明であるが、明治に入ってから対馬宗家が売却したものだと推測される。当館所蔵の重要文化財「対馬宗家関係資料」の文書箱のうち、箱3（P18）の蓋上書には、「入 一朝鮮御陣之時秀吉公方対馬国乱妨禁制之御朱印朝鮮国南海嶋禁制之御朱印一巻」とある。「入」という字が付けられたものは、明治11年(1878)に対馬から東京へ送られたものである。当館の「対馬宗家関係資料」にはこの巻子は含まれておらず、行方不明である。近代に入って流出した「宗家文書」は、卷子装から掛幅装に改装される場合が多いが、本品は卷子装の状態が維持されたまま、現在まで伝わったという点で大変貴重である。		
購入金額	15,000,000 円		

